

2026年度 第5回（10月）北辰テスト対策 予想問題 解答・解説

国語

1 問1（4点）

イ

- ①「おめでとう、と言った自分の声が、自分のものではないみたいに遠くで聞こえた」の前後に根拠がある。
- ・直前: 主役の発表場面（親友の千夏に決定）
 - ・直後: 「私だって、たくさん練習した。台本は付箋だらけになるまで読み込んだ。それなのに——。」＝努力が報われなかった悔しさ
 - ・「自分のものではないみたいに遠く」＝祝福の言葉と本心が切り離され、現実感を失っている状態
 - ・イ「祝福を口にしながらも、悔しさで気持ちが追いつかず、現実感を失っている」が正答
 - ・ア「選考のやり直しを求めたい」は本文にない（強度過剰）
 - ・ウ「驚きはなく、落ち着いて」は「自分のものではないみたい」という描写と矛盾（因果が逆）
 - ・エ「演劇への興味を失い」は本文にない（翌日、自ら照明係に手を挙げている）
- 採点ポイント: 「祝福の言葉」と「悔しさ」が乖離している複層的な心情を捉えているか。

1 問2（4点）

ウ

- ②「思わず息をのんだ」の直後に根拠が連続する。
- ・「千夏が、光の輪の中で、物語の中の人物になっていた」
 - ・「光が当たる場所と、当たらない場所。たったそれだけのことで、ただの舞台が、別の世界に変わる」
 - ・「レバーに置いた自分の指先が、少し震えていた」＝感動の身体表現
 - ・ウ「光の当て方ひとつで舞台が別の世界に変わることを目の当たりにし、心を強く動かされている」が正答
 - ・ア「機材操作への不安・緊張」は指先の震えの原因の取り違い（直前の「半信半疑」は光の力への半信半疑であり、操作の不安ではない）
 - ・イ「実力の差に打ちのめされ」は本文にない（感動であって挫折感ではない）
 - ・エ「責任の重さにおびえ」は本文にない
- 採点ポイント: 指先の震え＝恐れではなく感動、という文脈判断ができているか。

1 問3 (6点)

(例) 自分の光で舞台を作り、演じる千夏を支える仕事をやりぬきたい (29字)

正答例:

- ・(例1) 自分の光で舞台を作り、演じる千夏を支える仕事をやりぬきたい (29字)
- ・(例2) 舞台に立つ千夏を自分の明かりで支える、大切な仕事をやりとげたい (31字)
- ・(例3) 主役でなくても、自分の光で舞台を作り、千夏を支える仕事がしたい (31字)

根拠: ②の場面(光が舞台を別世界に変えることの発見) + 千夏の言葉「美緒の明かりの中なら、思いきり演じられる」 + 美緒自身の言葉「千夏がいちばんきれいに見える明かり、作るから」。①の「自分のものではない声」との対比で、③は本心からの決意表明。

採点基準:

| 要素 | 配点内訳 | 判定基準 |

| --- | --- | --- |

| ①「舞台」が使えている | 1点 | 指定語必須 |

| ②「支える」が使えている | 1点 | 指定語必須 |

| ③照明(光・明かり)という自分の仕事への言及がある | 2点 | 「光／明かりで」等 |

| ④千夏(演じる人)のために、という方向性が示されている | 1点 | 「千夏を」「演じる人を」等 |

| ⑤25～35字の字数を守っている | 1点 | 逸脱は減点 |

指定語の使用順序は問わない。

1 問4 (4点)

エ

④「暗闇の中で、私は誰よりも先に千夏の動きを追っていた」の直後が根拠。

- ・「千夏が舞台の中央へ踏み出す半歩前に、そこへ光を届けておく」＝先回りの操作
- ・「せりふと、音楽と、光。全部がそろったとき、体育館は確かに、物語の場所になった」＝自分の役割が舞台を構成しているという自覚
- ・エ「千夏が最も輝いて見えるように、自分の役割に集中し、先回りして光を届けようとしている」が正答
- ・ア「主役への未練」は本文にない(③以降、美緒の心は照明の仕事に向かっている)
- ・イ「不安で頭がいっぱい」「計画表にしがみつく」は本文にない(自ら光の設計図を作り上げた主体的な姿と矛盾)
- ・ウ「客席の反応が気になって」は本文にない(「客席のざわめきがずっと遠のいた」と集中の描写がある)

採点ポイント: 「誰よりも先に」＝未練ではなく職務上の先回り、という読み。

1 問5 (5点)

ア

⑤「胸の中は、不思議なくらい満たされていた」の前後に根拠。

- ・直前: 「拍手は、私には届かない場所で鳴っている。それでも」＝譲歩の構造
- ・直後: 「あの舞台を包んでいた光は、私が作った光だ」＝自負・誇り
- ・ア「拍手を受ける立場ではなくても、自分の光があつた舞台を作り上げたのだという充実感と誇り」が正答
- ・イ「来年こそは必ず自分が主役に」は結末(「どちらを選んでも、きっと大丈夫」と矛盾(強度過剰))
- ・ウ「後悔をかみしめている」は「満たされていた」と正反対(因果が逆)
- ・エ「安心感からぼんやり」は「満たされていた」の内実(誇り)とずれる

採点ポイント: 「それでも」の譲歩→充足、という構造を読めているか。

1 問6 (5点)

ウ・オ

- ・ア: スポットライトの当たる舞台と、「光の当たらない操作卓」「暗闇の中」の対比が繰り返され、美緒の役割発見を象徴している→適切
- ・イ: 「歩道の白線の上を選ぶように歩きながら、ぽつりぽつりと話した」は、言い出しにくいことを打ち明ける千夏のためらいを行動描写で表している→適切
- ・ウ: 本文は「私（美緒）」の一人称視点で終始しており、千夏の視点からの語りはない→不適切→正答
- ・エ: ①「自分のものではないみたいに遠くで聞こえた」声と③「確かに自分の声だった」が対応し、美緒の変化を印象づけている→適切
- ・オ: 回想場面はなく、オーディション発表から文化祭本番までが時間の流れに沿って描かれている→不適切→正答

採点ポイント: ウ・オの2つを両方選んで正答 (5点)。過不足があれば0点 (部分点なし)。

2 問1(1) (2点)

ひんばん

頻繁＝しきりに行われること。

採点ポイント: 「ひんばん」等の誤読に注意。

2 問1(2) (2点)

たずさ (わる)

携わる＝ある仕事に関係する。

採点ポイント: 「けい」(音読み) は不正解。「携える (たずさえる)」との送りがな混同に注意。

2 問1(3) (2点)

奮 (って)

採点ポイント: 「振るって」「震って」は不正解 (「勇気を奮う」＝ふるい起こす)。

2 問1(4) (2点)

運賃

採点ポイント: 「賃」の字形 (任+貝) が採点対象。

2 問2(1) (2点)

ア

「続きをソウゾウする」＝想像 (「創造」ではない点に注意。文脈は「思い描く」)。ア理想 (想) ✓ / イ演奏 (奏) / ウ体操 (操) / エ倉庫 (倉)。すべて「ソウ」と読むが、「想像」と同じ漢字を含むのはアのみ。

採点ポイント: 同音の別漢字 (奏／操／倉) を音だけで選ばず、意味から書き分けられるか。

2 問2(2) (2点)

イ

「練習のコウカ」＝効果。ア下校（校）／イ有効（効）✓／ウ講堂（講）／エ成功（功）。すべて「コウ」と読むが、「効果」と同じ漢字を含むのはイのみ。

採点ポイント：同音の別漢字（校／講／功）を音だけで選ばず、意味から書き分けられるか。特に「成功」の「功」との混同を誘う設計。

2 問3 (3点)

イ・ウ・エ

「ない」を付けて直前の音で判別する（ア段＝五段／イ段＝上一段／エ段＝下一段）。

- ・ア 「起き」＝起きる→起きない（キ＝イ段）→上一段活用
- ・イ 「調べ」＝調べる→調べない（ベ＝エ段）→下一段活用 ✓
- ・ウ 「教え」＝教える→教えない（エ＝エ段）→下一段活用 ✓
- ・エ 「まとめ」＝まとめる→まとめない（メ＝エ段）→下一段活用 ✓
- ・オ 「帰っ」＝帰る→帰らない（ラ＝ア段）→五段活用（「切る」「入る」などと同じ、上一段・下一段と紛らわしい五段動詞の定番トラップ）
- ・カ 「来る」＝カ行変格活用

採点ポイント：イ・ウ・エの3つ全てを選んで正答（3点）。過不足があれば0点（部分点なし）。「帰る」を下一段と誤認しないかが最大の分かれ目。

2 問4 (3点)

ウ

「の」の用法の識別。

- ・ア 「泳ぐのが得意だ」＝体言の代用（「泳ぐこと」と言いかえられる）
- ・イ 「兄の作った模型」＝主格（「兄が作った」と言いかえられる）
- ・ウ 「秋の空」＝連体修飾語を作る「の」（体言「空」を修飾する）→正答
- ・エ 「行くの行かないのと」＝並立（～の～のと、と並べる用法）

採点ポイント：「が」に言いかえられれば主格、「こと」に言いかえられれば体言の代用、というテストを使い分けられるか。

2 問5 (3点)

ア

四字熟語の空欄補充。

・文脈：「過去の文化祭の記録を調べ、そこから新しいアイデアのヒントを得る」＝古いものをたずねて新しい知見を得る

- ・ア 「温故知新」＝昔の物事を研究し、そこから新しい知識や道理を得ること→正答
- ・イ 「単刀直入」＝前置きなしにいきなり本題に入ること
- ・ウ 「十人十色」＝人によって考えや好みがそれぞれ違うこと
- ・エ 「大器晩成」＝大人物は世に出るまでに時間がかかること

採点ポイント：「故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る」の構造と文脈の一致。

2 問6(1) (3点)

イ

空欄Ⅰは「(私が) 田中さんのお話を [Ⅰ] と思っています」＝自分の「聞く」動作をへりくだる謙譲語が必要。

- ・ア 「お聞きになりたい」＝尊敬語。自分の動作に使うのは誤り
- ・イ 「伺いたい」＝「聞く」の謙譲語「伺う」で適切→正答
- ・ウ 「拝見したい」＝「見る」の謙譲語。「お話」を対象にするのは誤り
- ・エ 「申し上げたい」＝「言う」の謙譲語。「聞く」の意味にならない

採点ポイント: 敬語の種類(尊敬／謙譲)の使い分けと、謙譲語の動詞そのものの意味(伺う＝聞く・訪ねる、拝見する＝見る、申し上げる＝言う)の両方を問う。

2 問6(2) (2点)

ウ

Bさんの発言は二つ。

- ・「今、科学の新書というお話がありましたが、読む人が増えているのは、なぜだと思われますか」＝相手の答えの中の言葉を取り上げた掘り下げ質問
- ・「なるほど。きっかけは動画でもよくて、そこから本につながる事が大切なのですね」＝聞いた内容の言い換えによる確認
- ・ウ 「言葉を取り上げて理由をさらに尋ねたり、自分の言葉で言いかえて確かめたりしている」→正答
- ・ア 「順番どおりに尋ねている」は事実と反する(相手の答えを受けて質問している)
- ・イ 「自分自身の読書体験を語る」は事実と反する
- ・エ 「あいまいな点を指摘して改めるよう求める」は事実と反する

採点ポイント: 「掘り下げ質問」＋「言い換え確認」というインタビューの基本技術を発言から特定できるか。

2 問6(3) (2点)

ア

空欄Ⅱは「いただいたお話は、[Ⅱ] という形で図書だよりの特集記事にまとめたい」＝インタビューで実際に得た内容の整理。

- ・得た内容は、(a)中学生に人気の本の傾向(部活動・友情の小説、科学の新書)、(b)動画などをきっかけに本にたどり着く読者が増えているという話
- ・ア 「人気のある本の傾向と、動画などをきっかけに本にたどり着く読者が増えているというお話を紹介する」→正答
- ・イ 「売り上げを伸ばす方法の提案」は話合われていない
- ・ウ 「図書委員のおすすめ本だけ」はインタビュー内容と無関係
- ・エ 「動画やテレビをやめるべき」は田中さんの発言(「入り口は何であってもううれしい」)と正反対

採点ポイント: まとめ＝実際の発言内容の正確な整理であること。エは田中さんの発言の趣旨の取り違えを誘う設計。

3 問1 (4点)

イ

傍線①の直後の二文に理由が明示されている。

- ・「雑木林が放置されると、木々は伸び放題になり、林の中は一年中薄暗くなる。明るい地面を頼りに生きてきた草花や昆虫は、生きる場所を失ってしまうのだ」
- ・前段落の「定期的に木が切られ、落ち葉がかき集められる林は、地面まで日の光が届く、明るい林になる」との対応
- ・イ「人の利用によって保たれてきた明るい環境が失われ、その明るさを頼りに生きてきた生き物が暮らせなくなるから」→正答
- ・ア「見張ることができなくなる」は本文にない
- ・ウ「木が切られすぎて林がなくなる」は因果が逆（使わなくなる＝切らなくなることが問題）
- ・エ「大気や水の汚染」は本文にない（石油・電気は薪炭の代替として登場するだけ）

採点ポイント：「放置→暗くなる→明るさに頼る生き物が消える」という因果連鎖を再現できているか。

3 問2 (4点)

ア・エ・オ

「関わり続けることで保つ」＝人が暮らしの中で適度に利用し続けることが、生き物の環境を保っている自然（＝里山）。

- ・ア 薪炭のための雑木林＝本文の例そのもの ✓
- ・イ 原生林＝「手を触れずに残す」側の例（本文では里山と対置される）
- ・ウ 植物園＝人工的に造る話であり、暮らしの中の利用と自然の豊かさの「合作」ではない
- ・エ 落ち葉を肥料にする林＝本文の例そのもの（「落ち葉をかき集めて田畑の肥料にした」）✓
- ・オ 棚田＝本文の例そのもの（「水路やあぜは……生き物たちの、かけがえのないすみか」）✓
- ・カ 造成地＝自然を失わせる開発であり、「使いながら保つ」に当たらない

採点ポイント：ア・エ・オの3つ全てを選んで正答（4点）。過不足があれば0点（部分点なし）。イは「守る自然」ではあるが「関わり続けることで保つ」側ではない、という本文の二分法を正確に適用できるか。

3 問3 (6点)

(例) 人の手が入り続けることで、多様な生き物のすみかが保たれてきた (30字)

正答例:

- ・(例1) 人の手が入り続けることで、多様な生き物のすみかが保たれてきた (30字)
- ・(例2) 人の手で適度に使われ続けることが、多様な生き物の環境を保ってきた (32字)
- ・(例3) 人の手が入り続けたからこそ、多様な生き物の暮らす環境が保たれてきた (33字)

根拠: 傍線②の直後「人が自然を使うことと、自然が豊かであることは、ここでは対立していない。むしろ、適度に使い続けることこそが、多様な生き物の暮らす環境を保ってきたのだ」。

採点基準:

| 要素 | 配点内訳 | 判定基準 |

| --- | --- | --- |

| ①「人の手」が使えている | 1点 | 指定語必須 |

| ②「多様」が使えている | 1点 | 指定語必須 |

| ③人が「使い続ける・関わり続ける」継続性が示されている | 2点 | 「入り続ける」「使われ続ける」等 |

| ④生き物の環境・すみかが「保たれた」という帰結が示されている | 1点 | 「保つ」「育んだ」等 |

| ⑤ 25～35字の字数を守っている | 1点 | 逸脱は減点 |

指定語の使用順序は問わない。

3 問4 (4点)

ウ

傍線③は直前の段落のまとめ。

- ・『「自然を守る」ことには、『手を触れずに残す』だけでなく、『関わり続けることで保つ』という、もう一つの形があるということだ』
- ・ウ「手を触れずに残すことだけでなく、適度に利用し関わり続けることで保つこともまた、『自然を守る』ことの一つの形だ」→正答
- ・ア「原生林にも人が手を入れて」は筆者が明確に否定した内容（「すべての自然に人が手を入れるべきだ、ということではない」）
- ・イ「遠くから見守り続けることが最も大切」は傍線部（「遠くからながめることではなく」）と正反対
- ・エ「すべての市民が参加すべき」は本文にない（ボランティアの例は挙がるが義務の主張はない）

採点ポイント：譲歩段落（原生林）を挟んだうえでの「もう一つの形」という限定つきの主張を正確に捉えているか。

3 問5 (5点)

イ

「適切でないもの」を選ぶ問題。

- ・ア：冒頭「どのような行動を思い浮かべるだろうか」の問いかけ→「私も長い間、そう思い込んでいた」→「この思い込みを静かにくつがえす」という展開がある→適切
- ・イ：本文に実験・数値データは登場しない（「絶滅が心配されているものが少なくない」という定性的な言及のみ）→不適切→正答
- ・ウ：雑木林（薪炭・落ち葉）と棚田（水路・あぜ）の具体例で「合作」を説明している→適切
- ・エ：「もちろん、人がいっさい手を触れずに守るべき自然もある」（屋久島の原生林）と、主張が当てはまらない場合に触れている→適切

採点ポイント：「具体例がある」ことと「数値データで証明している」ことの区別。

3 問6 (5点)

ウ

本文全体の主旨：

- ・「自然を守る＝手を触れない」という思い込みを、里山の実例でくつがえす
- ・里山の自然は人と自然の「合作」であり、適度に使い続けることが多様な生き物の環境を保ってきた
- ・結論：「守る」には「関わり続けることで保つ」形もある。「長い付き合いの歴史に目を向けること」が大切
- ・ウ「人が適度に関わり続けることで保つという形もあり、人と自然の長い付き合いの歴史に目を向けることが大切」＝結論と一致→正答
- ・ア「絶滅が心配されている生き物をすべて救える」は本文にない（強度過剰）
- ・イ「原生林より里山のほうが価値が高い」は本文にない（筆者は原生林の価値も明確に認めている）
- ・エ「昔の暮らしに戻ることが最もよい方法」は本文にない（強度過剰。筆者は現代のボランティア活動を肯定的に紹介している）

採点ポイント：「もう一つの形『も』ある」という筆者の均衡のとれた立場（二者択一でも優劣でもない）を捉えているか。

4 問1 (4点)

おもいかえして

「思ひ返して」の「ひ」は語中のハ行。歴史的仮名遣いでは、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は現代仮名遣いで「わ・い・う・え・お」に直す。

・思(おも)ひ返して → おもいかえして

採点ポイント: すべてひらがなで「おもいかえして」と書いて正答。「おもひかえして」(直し忘れ)、「おもいがえして」(濁点付加)は不正解。漢字交じりの解答も設問の指示(すべてひらがな)に反するため不正解。

4 問2 (4点)

ウ

①「主を尋ねて返し給へ」の直前に妻の理由が二つ明示されている。

・「我らは商ひして過ぐれば、事も欠けず」＝自分たちは商売で暮らしていけるので不足はない

・「この主、いかばかり嘆き求むらん。いとほしきことなり」＝持ち主はどれほど嘆いて探しているだろう、気の毒だ

・ウ「自分たちは商売で暮らしていけるうえに、持ち主がどれほど嘆いているかと気の毒に思ったから」＝二つの理由をともに含む→正答

・ア「罰を受けることを恐れた」は本文にない

・イ「お礼を期待した」は本文にない(「心すなほに欲なき者」と正反対)

・エ「恥ずかしく思い」は本文にない

採点ポイント: 冒頭の人物設定「心すなほに欲なき者」と発言内容の整合を確かめられるか。

4 問3 (4点)

(例) 軟挺が六つしか入っていない (13字)

正答例:

・(例1) 軟挺が六つしか入っていない (13字)

・(例2) 銀の軟挺が六つしか入っていない (15字)

・(例3) 七つではなく六つしか入っていない (16字)

根拠: 判決文「主は、七つあらん軟挺を尋ねて取るべし。これは六つあれば、別の人のものにこそ」。主の「七つあった」という言い分をそのまま採用したうえで、「この袋は六つだから別人の物」と導く逆手の論理。

採点基準:

| 要素 | 配点内訳 | 判定基準 |

| --- | --- | --- |

| ① 袋の中身が「六つ」であることが示されている | 2点 | 数の明示必須 |

| ② 「(七つではなく) 六つしかない」という不足・不一致の意が示されている | 1点 | 「しか」「だけ」等 |

| ③ 現代語として自然で、10～20字の字数を守っている | 1点 | 古語の残存・字数逸脱は減点 |

4 問4 (4点)

ア

判決の巧みさは次の三点。

- ・「確かの証拠なければ判じがたし」＝証拠がない前提に立ち、誰のうそも直接には断定しない
- ・「主の言葉も違はざれば、主は、七つあらん軟挺を尋ねて取るべし」＝主の言い分（七つ）を「そのまま認める」形で、この袋（六つ）を主のものではないとする
- ・結果として、うそをついて礼を惜しんだ主は何も得られず、正直な夫婦が六つすべてを与えられた
- ・ア「双方の言い分をそのまま認める形をとりながら、うそをついて礼を惜しんだ主には何も与えず、正直な夫婦が報われる結果にした」→正答
- ・イ「動かぬ証拠を集め」「きびしい刑罰」は本文と正反対（証拠はなく、刑罰も科していない）
- ・ウ「国が預かる」「納得するまで話し合い」は本文にない
- ・エ「三つずつ分け与えた」は本文にない（六つすべてを夫婦に与えた）

採点ポイント：「相手の言葉を逆手に取る」という裁きの論理構造まで読み切れているか。